＜前回＞新約聖書と新約聖書学

（１）近代的知のモデルとしての自然主義

１．西洋の「宗教と科学」関係論は、18 世紀、大きな変動に遭遇する。現代人がイメージする科学、あるいは宗教と科学との関係理解、そして聖書研究も、この変動に規定されている。啓蒙主義→実証主義的科学

５．近接的な作用因による因果律と自然

→ 機械論的自然 cf. 錬金術的自然

日常的経験とのずれ（デカルト）

↓

超自然・奇跡の排除あるいは合理化

（２）自然主義と宗教、争点は何か

（３）近代的知と歴史主義

１．自然主義と歴史主義

近代的知の二つの動向（因果律の二つのタイプ）

作用連関と意味連関の組み合わせの諸パターン。

→ 自然科学／精神科学、説明／理解

２．「近代」と人間的現実の歴史化

現実は永遠不変ではなく、変化する。人間の諸活動の集積、所産。

↓

近代歴史学、歴史的視点

３．「歴史主義」の多義性あるいは混乱

「歴史主義」「その悪しき側面から完全に引き離され、人間とその文化や諸価値に関するあらゆるわれわれの思惟の根本的歴史化という意味において理解されねばならない」、「しかし、この歴史主義に対して、自然主義が同様に原理的かつ包括的な仕方で対立している」（トレルチ、諸問題・上、158）、「自然主義は、あらゆる質的なことや直接的経験を度外視する法則化の連関として、またそのようなものとして現実総体を包括する連関として理解されなければならない」、「自然主義と歴史主義とは、近代世界の二つの巨大な科学的創造であり、この意味においてそれらは、古代にも中世にも知られていないものであった」（159）、「近代的思惟一般が持っている二つの本質的動機」（164）。

４．存在レベルにおける歴史・歴史化（存在論的概念）

・人間存在の歴史性

・聖書的な歴史的思惟（聖書の宗教が歴史的思惟であるという意味）

聖書的人格主義とギリシャ的存在論、動的歴史的と静的形而上学的、といった対比。

・近代化が歴史化であるという意味での歴史

↓

歴史・歴史化とはどのレベルにおけるいかなる現象・事態を意味しているのか。

５．知・人間的現実の地平としての歴史

倫理的なあるいは宗教的な価値・理想は、歴史的な形成物（歴史的な原因と結果の連鎖の中にあり、その意味はこの連関という全体の中で規定される）である。

cf. 自然法

↓

価値や理想の妥当性はそれが形成生成してきた歴史的連関（文脈）の範囲内に限定され

る。この限界を超えた普遍化は不可能あるいは間違っている。といった認識あるいは感覚。
　相対性の意識＝歴史相対主義→ニヒリズム

（４）近代聖書学とその諸前提

１．知・人間的現実の地平としての歴史（歴史化）→歴史主義・歴史的思惟
　倫理的なあるいは宗教的な価値・理想は､歴史的な形成物(歴史的な原因と結果の連鎖の中にあり、その意味はこの連関という全体の中で規定される)である。

２．近代的知・歴史主義に基づいたキリスト教思想（研究）＝近代聖書学の成立
　近代世界（近代的な日常性）へのキリスト教の適応という歴史的動向において。

３．近代歴史学の成立→近代的知の基礎学としての歴史学
　言語学、法学、哲学、神学、地質学、生物学など

４．トレルチ

５．パネンベルク

・「トレルチによれば歴史的批判は、「すべての歴史的出来事の原理的同質性」を含む「類比の適用」に基づき、また、歴史的には普遍的な相関関係、「精神的・歴史的生のあらゆる現象の相互作用」があるという前提に基づいている。」(54)、「原理的同質性」、「あらゆる出来事は同質性を持つはずであるという要請」、「類比の持っている認識の力は、まさしく類比が非同質的なもののなかに同質的なものを見ることを教えるという点に基づく」(59)。

↓

方法論的現在中心主義＝歴史的思惟の解釈学的構造
　制度的再帰性における歴史学・歴史研究

（５）近代聖書学の方法と帰結

１．歴史的批判的方法：文献学＋歴史学→近代聖書学のパラダイム

２．伝承史：イエス→→断片的な口承伝承（弟子たち）→収集・文書化→編集
　・現存のテキストから最古層へ遡及し再構成する。弟子集団＝共同体における伝承の法則性の確定→逆算（様式批判：文学様式と生活の座との対応）
　・編集者の意図・神学の解明（編集批判）

３．様式批判・編集批判から文学社会学（テキストと社会との相関関係・相互連関）へ。
　そして、新しい新約研究の動向＝方法論の拡張・総合化（歴史的批判的方法を超えて）

＜補足＞

クロッサン『イエスとは誰か――史的イエスに関する疑問に答える』
　新教出版社、2013 年。

「古代人が文字通りに伝えた話を象徴的に捉えてやるほど今の私たちが賢いのではなくて、古代人が象徴的に語ったものを文字通りに捉えてしまうほど今の私たちが鈍いのです。古代人は自分のしていることが分かっていた。私たちは分かっていないのです。」(104)

２．イエスと「神の国」運動

（１）近代聖書学における「神の国」論

１．キリスト教神学と同様に、聖書学においても、「イエス」は常に研究者の中心的な関心を占めてきた。→　歴史的イエスの探求、「神の国」「終末論」の問題。

２．「イエス研究／終末論」の変遷：「神の国」が常に議論の中心に位置してきた。

1) 19 世紀：近代聖書学の確立期、イエス伝研究、市民社会の倫理の教師イエス

2) 19 世紀末～ 20 世紀初頭：ヴァイス、シュヴァイツァー

黙示的終末論の再発見→古代の黙示的終末論の宗教家イエス
「イエス伝研究」の挫折、ナザレのイエスと信仰のキリストとの分裂

3) 20 世紀聖書学のパラダイムの浸透：弁証法神学、モルトマンやパネンベルク
・このパラダイムの影響は聖書学あるいは神学にとどまらない。
京都学派のキリスト教理解の場合。
・黙示的終末論か現在的終末論かという論争的枠組み。

4) 1980 年代以降：20 世紀の聖書学のパラダイムの崩壊と新しいイエス探究（イエス・ルネサンス）。
黙示的終末思想に基づく宗教者イエスという理解の相対化、知恵の教師イエス。

（２）神の国の宗教運動 → 隠喩としての「神の国」

３．新約聖書学 → 仮説・蓋然性における結論（伝承史を逆に辿る）
伝承史と二資料仮説
歴史的懐疑・歴史的批判的方法論の帰結
イエスの伝記的事項については大まかなことしか言えない（福音書は伝記ではない）
→ イエスの教えについてかなりの蓋然性で言えること

４．イエスの福音
①「時は満ち、神の国は近付いた。悔い改めて福音を信じなさい」（マルコ 1:15）
②「子たちよ、神の国に入るのは、なんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」（マルコ 10:24b ～ 25）

５．「神の国」の宣教（新しい契約の実現）
国（バシレイア）：神の制定した秩序（支配） cf.国家機構、王国

６．神の秩序←→この世の秩序（古い秩序）＝罪（ハマルティア）
階層性・二分法・対立 的はずれ cf:規則の侵害
関係の歪み（神関係、自己関係、他者関係）

７．「罪」＝「的外れ」＝「関係の歪み」（人間関係が歪んでしまっていること）
人間存在（個人／社会）＝関係存在（神関係、自己関係、他者関係）

＜キルケゴール『死に至る病』＞

「人間とは精神である。精神とは何であるか？ 精神とは自己である。自己とは何であるか？ 自己とは自己自身に関係するところの関係である、すなわち関係ということには関係が自己自身に関係するものになることが含まれている、――それで自己とは単なる関係ではなしに、関係が自己自身に関係するというそのことである。人間は有限性と無限性との、時間的なるものと永遠的なるものとの、自由と必然性との、綜合である。綜合とは二つのものの関係である。しかしこう考えただけでは、人間はいまだなんらの自己でもない。」（20 頁）、「関係がそれ自身に対して関係するということになれば、この関係こそ積極的な第三者なのであり、そしてこれが自己なのである。」（21 ）

「絶望とは自己自身に関係する関係としての自己（綜合）における分裂関係である」、「綜合のうちに分裂の可能性が存するのである。」（24）

「絶望とは分裂関係から結果し来るのではなく、自己自身に関係する関係から結果し来るものだからである。そして人間は自分の自己から脱け出ることができないように、自己自身への関係から脱け出ることもできない。」（27）

８．イエス時代のユダヤ社会・地中海世界（この世）：
典型的なしかも極端な不平等社会

富める者／貧しい者、男／女、大人／子供、自由人／奴隷、ローマ市民／非ローマ人
浄い人・義人／不浄な人・罪人

９．神の秩序の実現＝古い秩序の転換＝罪の解決＝救済　→　福音
↓
イエスの宗教運動：巡回・共同生活／論争・教え／奇跡行為（病の癒し）

「8:1 すぐその後、イエスは神の国を宣べ伝え、その福音を告げ知らせながら、町や村を巡って旅を続けられた。十二人も一緒だった。2 悪霊を追い出して病気をいやしていただいた何人かの婦人たち、すなわち、七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリア、3 ヘロデの家令クザの妻ヨハナ、それにスサンナ、そのほか多くの婦人たちも一緒であった。彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた。」（ルカ）

「3:28 そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです。」（ガラテヤ）

10．食卓としての「神の国」。誰と食卓を囲むのか、囲みたいのか。

11．開かれた共食における神の国（クロッサン）：イエスの宗教運動において現実化しつつあった「神の国」は、イエス運動の食卓を見る限り、罪人と食事を共にするというあり方として確認できる。階層的な社会秩序と関係の歪みに対する徹底的な平等主義である。

「大宴会のたとえ」（ルカ 14.15-24）

「14:15 食事を共にしていた客の一人は、これを聞いてイエスに、「神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう」と言った。16 そこで、イエスは言われた。「ある人が盛大な宴会を催そうとして、大勢の人を招き、17 宴会の時刻になったので、僕を送り、招いておいた人々に、『もう用意ができましたから、おいでください』と言わせた。18 すると皆、次々に断った。最初の人は、『畑を買ったので、見に行かねばなりません。どうか、失礼させてください』と言った。19 ほかの人は、『牛を二頭ずつ五組買ったので、それを調べに行くところです。どうか、失礼させてください』と言った。20 また別の人は、『妻を迎えたばかりなので、行くことができません』と言った。21 僕は帰って、このことを主人に報告した。すると、家の主人は怒って、僕に言った。『急いで町の広場や路地へ出て行き、貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人をここに連れて来なさい。』22 やがて、僕が、『御主人様、仰せのとおりにいたしましたが、まだ席があります』と言うと、23 主人は言った。『通りや小道に出て行き、無理にでも人々を連れて来て、この家をいっぱいにしてくれ。24 言っておくが、あの招かれた人たちの中で、わたしの食事を味わう者は一人もいない。』」

12．平等な開かれた食卓としての救い：
人間としての自己肯定可能な共同体内に自分の居場所を見出すこと＝意味の回復
断片的実現と未完成な全体、神の国は生成途上にある。

13．イエス時代の通常の「神の国」理解：預言者的終末論、黙示的終末論
↓
イエス運動における「神の国」の意味の転換＝隠喩化
善人が入ることができる神の国　→　罪人が招かれる神の国

14．知恵の教師イエス：慣習的知恵（既存の秩序肯定）、転換的知恵（既存の秩序転換）

15．知恵から終末論へ：人間性の回復される現実をもたらす知恵
終末論のあるべき位置とは？

16．理念と現実の緊張・対立（ずれ）　→　キリスト教の動的展開
「神の国は近づいた」、未だ生成途上にある。
17．宇宙論的問題設定、宇宙的キリスト、あるいは拡張された神の家族の射程
時間と言語
18．エコロジー神学にとっての「神の国」・終末論
19．クロッサンの方法論（『イエスとは誰か――史的イエスに関する疑問に答える』
新教出版社、2013 年。）

「マタイとルカのイエス物語は、おおかた独自の取材ではなくマルコの焼き直しで、わざわざ焼き直すからにはそれなりの考えがあった。ということは、どの福音書もイエスを解釈しようとしているわけで、ただの伝記ではないのです。」（15）

「イエスの実像を描くには、いろいろな学問を使います」、「三機の大きなサーチライトで夜空の物体を照らすとします」、「そのサーチライトの一つが、通文化研究です。イエスの生きた社会環境を知るために、これを使います。何をするかというと、当時と似た社会を一通り見渡すのです。」（16）

「二の目のサーチライトは、イエス時代のギリシャ・ローマ史・ユダヤ史研究です。」
「三つ目のサーチライトは、本文研究です。」「伝承の三段階を見分けることであります。」（17）

「自分自身の時代と共同体の必要に応じて、イエスの言動を語り直してもかまいませんでした。ですから、福音書の裏にイエスの実像を探ると言っても、それで福音書の価値を貶めるつもりではありません。ただ、福音書は歴史でも伝記でもなく、特定の時代と場所と共同体の解釈なのです。イエスの実像を見るためには、そうした解釈を裏読みする必要があるわけです。」（18-19）

「一個だけ独立した証言のある記事よりも、むしろ複数の独立した証言のある記事に基づいてイエスを描こうとするのです。この方法は確実ではないかもしれませんが、少なくとも不正確にはなりにくいでしょう。」（19）

＜参考文献＞

１．Marcus J. Borg, *Jesus in Contemporary Scholarship*, Trinity Press International, 1994.
（『イエス・ルネサンス』教文館 。）
, Conflicht, Holiness and Politics in the Teaching of Jesus, Trinity Press, 1984.
２．John Dominic Crossan, *The Historical Jesus. The Life of a Mediterranean Jewish Peasant,*
,Jesus. A Revolutionary Biography, HarperSanFrancisco, 1995.
（ジョン・ドミニク・クロッサン『イエス あるユダヤ人貧農の革命的生涯』新教出版社）
３．荒井　献　『イエスとその時代』岩波新書
４．田川建三　『イエスという男』三一書房。
５．大木英夫　『終末論』紀伊國屋新書。
６．芦名定道・小原克博　『キリスト教と現代――終末思想の歴史的展開』世界思想社。
７．エドガー・Ｖ・マックナイト『様式史とは何か』ヨルダン社。
８．ノーマン・ペリン『編集史とは何か』ヨルダン社。
９．ダニエル・パット『構造主義的聖書釈義と何か』ヨルダン社。
10．浅野淳博ほか『新約聖書解釈の手引き』日本キリスト教団出版局。
11．Ｎ・Ｔ・ライト『新約聖書と神の民　上巻　キリスト教の起源と神の問題１』
新教出版社。